

平成30年度幼稚園教育課程研究協議会 第1分科会 協議概要

発表者	射水市立大門わかば幼稚園	坂口 綾子
記録者	砺波市立南部認定こども園	今井 一葉
	砺波市立太田幼稚園	伊藤 瑞穂

1 伝達講習の概要

- (1) 幼稚園教育要領の改訂の基本方針
- (2) 幼稚園教育要領総則の改正の要点
 - ① 幼稚園教育の基本
 - ② 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」
 - ③ 教育課程の役割と編成等
 - ④ 指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価
 - ⑤ 特別な配慮を必要とする幼児への指導
- (3) ねらい及び内容の改善・充実
- (4) 教育課程に係る教育時間終了後等に行う教育活動等
- (5) 体力向上マネジメント
 - ① 体力の捉え方
 - ② 幼児期における身体活動の現状
 - ③ 幼児期における運動の意義
 - ④ 幼児期の運動の在り方
 - ⑤ 体力向上マネジメントの推進

2 研究発表の概要

- (1) 分科会協議主題
幼児理解に基づいた評価の在り方について
- (2) 研究の視点
 - ① 幼児理解や指導の改善につながる記録の取り方を探る。
 - ② 評価の妥当性や信頼性を高められるような取組の在り方を探る。
- (3) 実践より明らかになったこと
 - ・ 日案、写真、エピソード記録等を通して、幼児の行動の意味や育ちが理解でき、教師の援助や環境について、反省や評価をすることにつながった。
 - ・ 文章だけでなく、図や写真を用いて記録することで、表情や動き、周りの様子、人間関係等が以前よりも明らかになり、指導の改善に生かすことができた。
 - ・ 保育カンファレンスでは、各自の見方や考え方を付箋に書き込んでホワイトボードに位置付けて可視化することで、多様な考えからよりよい保育の在り方について検討することができた。
 - ・ 「実践」「記録」「保育カンファレンス」「省察」を繰り返すことで幼児理解が深まっていった。また、教師の援助や環境構成についても見直すきっかけとなった。一連のプロセスを大切にしたい保育を積み重ねていくことが大切である。
- (4) 今後の課題
 - ・ 幼児一人一人の育ちを的確に捉え、評価の妥当性や信頼性を高められるような記録や保育カンファレンスの仕方を工夫していきたい。
 - ・ 幼児の発達の状況を次年度や小学校に引き継ぐためには、どのようにしたらよいか探していきたい。

3 協議の概要

(1) グループ討議

- ① 幼児理解や指導の改善につながる記録の取り方を探る。
 - ・付箋に自由記述し、個人記録用紙に貼り付けている。職員は誰でも読むことができる。
 - ・要録だけでなく、個人記録を作成している。
- ② 評価の妥当性や信頼性を高められるような取組の在り方を探る。
 - ・全職員の共通理解のもち方や話し合いをする時間の設定の工夫が大切である。

(2) 質疑応答

Q:カンファレンスタイムは、どの時間を利用しているのか。

A:子供たちが帰った後に実施している。曜日を指定して時間をつくるなど、継続して実施することが大切であると考えている。

Q:保育を参観する際に配慮することは何か。

A:子供の見方に偏りが出ないよう複数の目で参観するようにしている。記録を基に、担任が見えていなかった周りの子供の様子にも気付くことができ、次への関わりに効果的につながっている。

4 指導助言事項 西部教育事務所 高岡 陽子 指導主事

(1) 幼児理解や指導の改善につながる記録について

- ・記録を取る際に大事なことは、記録を基に捉えた幼児の姿から環境構成や内容を見直すことである。「幼児に身に付けさせたい力が明確になっているか」「幼児が楽しめているか」「経験させたいことが体験できているか」を確かめることが大事であり、その点からも、写真を用いた記録は効果的である。また、一人一人の幼児の様子を再確認できるだけでなく、ポートフォリオとしても活用できる。保護者に成長ぶりを伝えることで、保護者とのよりよい関係を築くための有効な手立ての一つになる。
- ・教師の問題意識を基に必要な応じた方法で記録を取ることが大事である。また、細かく丁寧に記録を取ったからといって、幼児の思いや行動の背景を正しく理解できるわけでもない。記録によって「何が見えるようになり、どのように幼児を理解することができたか」「その理解が本当に正しいのか」「その理解をどう指導に生かすのか」がとても大事になる。

(2) 評価の妥当性や信頼性を高める取組の在り方について

- ・幼児理解のための記録と評価の妥当性・信頼性を高める取組の2点を関連させた「保育カンファレンス」を取り入れることで、指導の改善につなげることは効果的な方法である。
- ・保育カンファレンスの成果と課題を明確にし、見直しを図ることも評価の妥当性・信頼性を高める大切な段階である。参観を通して少し客観的に子供を見たり、他の保育者との関わり方を見たり、全体を見たりすることで、よりよい保育の在り方について自分自身の保育を振り返る場としたい。幼児が環境にどのように関わり、何を体験しているかについて観察・記録・分析し、多様な動きを楽しみながら経験できるように工夫を繰り返していくことが大切である。
- ・幼児が生活する姿から、「その幼児の心の世界を推測してみる」→「推測したことを基に関わってみる」→「関わりを通して幼児の反応から新しいことを推測する」などの一連のプロセスにより、幼児のよりよい成長へとつなげていく。
- ・保育カンファレンスでは、複数の目で捉えた幼児一人一人の育ちを多面的・多角的に理解し、今後の保育につなげていくことが大切である。